

研究ノート

日本国内の看護基礎教育におけるディベートの取り組みに関する 文献検討

－取り組みの実際と教育効果および課題－

宮里智子¹ 伊良波理絵¹ 高橋幸子¹ 金城忍¹ 嘉手苺英子¹

キーワード：看護基礎教育、ディベート

I. はじめに

社会の変化や医療ニーズの増大と多様化等の変化の中、学士課程における看護基礎教育には、社会や環境との関係において自己を理解するための素養や、創造的思考力を育成するための教養教育を前提とした看護職の基礎となる教育の充実が求められている。そして、社会の期待に応える看護実践能力を備えた看護職を排出するために、学士課程教育においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標、および、教育内容が文部科学省によって示された¹⁾。

一方、学士課程教育では、学生が、生涯学び続け、どんな環境においても答えのない問題に最善解を導くことができる能力を育成することが求められており、教育の質的転換が喫緊の課題とされている²⁾。アクティブ・ラーニングは、教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学習者の能動的な学習への参加を取り入れた教授・学習法の総称であり、グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク、プレゼンテーションを行うことで取り入れられる。平成24年3月26日の中央教育審議会大学分科会²⁾では、学生の思考力や表現力を引き出し、課題の発見や具体化からその解決へと向かう力の基礎を身につけることができるようになることを目指した、課題解決型

の能動的学修となるような、アクティブ・ラーニングによる授業展開の重要性が審議されている。

このような社会的動きの中、看護基礎教育では、学生の論理的思考能力などを育成する手段として、ディベートが注目されている。ディベートの始まりは、2500年前ギリシャの都市国家アゴラ（広場）で、人々が対話し議論し討議したことにある。現在実施されているのは、民主主義国家における議会ディベートや裁判所の法廷ディベート、学校教育における教育ディベートなどがある。学校教育におけるディベートは、論理的に思考し表現する能力の開発と育成を目的にした、知を創造するための方法論である³⁾。日本の学校教育にディベートが導入されたのは1990年代からであり、看護基礎教育の分野でも2000年代から導入されてきた。

そこで本研究は、日本国内の看護基礎教育におけるディベートに関する文献から、ディベートの取り組みの実際を明らかにし、ディベートの評価方法と評価結果に着目して、看護基礎教育でディベートを導入する教育効果、および、学士課程における看護基礎教育でディベートを導入する際の課題について検討することを目的とする。

II. 研究方法

1. 用語の定義

ディベートについて、北岡は「論理的に思考し

¹ 沖縄県立看護大学

表現する能力の開発と育成を目的にした、知を創造するための方法論である。話し合いや談合とは違い、肯定と否定に分かれて論理を戦わせ、論争が終わると、第三者の審判団の判定により、「どちらの主張が論理的であるかを判定する」と述べており³⁾、本研究もこれに基づく。

2. 研究方法

1) 文献検索

国内最大の医学文献情報データベースである医学中央雑誌Web第4版をデータベースとし、「ディベート」、「看護基礎教育」、「看護教育」をキーワードとして、1990年1月～2012年7月の文献検索を行った。さらに、絞り込み検索にて、原著、抄録のある論文を再度検索した。

2) 分析方法

まず、ディベートの組みの実際を明らかにするために、ディベート導入の目的、対象者とグループ人数、科目、論題、ディベートの評価方法と評価結果について文献毎に整理した。その中から、評価方法、および、評価結果に着目し、看護基礎教育でディベートを導入する教育効果、および、学士課程における看護基礎教育でディベートを導入する際の課題について検討した。

Ⅲ. 結果

3つのキーワードを入力した結果、69件の文献が得られた。さらに、その中から、原著、抄録のある22件の文献を選定した。次に、ディベートの取り組みの実際を明らかにするという本研究の目的に照らして、ディベートと他の教育方法とを比較検討している文献研究やディベートを行うときの情報検索に焦点を当てた研究など、ディベートの取り組みそのものに焦点を当てていない研究を除外した。さらに、グループ・ディスカッションのようにディベートの形式をとっていない文献や、客観的に結論を出すことに意義を見いだせない題

材を取り上げている文献など、適切な方法でディベートが行われているとは考えられない文献を除外した12件の文献を分析対象とした。

1. ディベートの取り組みの概観 (表1)

1) ディベート導入の目的

ディベート導入の目的は、大きく分類すると、①論題として取り上げた事柄に関心を向ける、または、その事柄に関する知識や理解を深める⁴⁾⁶⁾⁷⁾¹⁰⁾¹³⁾、②倫理観を養う、または、倫理的問題を理解する⁵⁾⁸⁾¹²⁾¹⁴⁾¹⁵⁾、③客観的分析力や論理的思考力、プレゼンテーションスキルなどのディベート能力の育成⁷⁾⁹⁾¹³⁾¹⁵⁾などがあり、ほとんどの文献が①、または②の目的に③ディベート能力の育成を併せた目的であった。

2) 対象とグループ人数

対象者は専修学校、短期大学および4年制大学の学生であり、准看護師養成所や五年一貫校の学生を対象とした報告はなかった。対象者が大学生であった文献は12件中3件であった⁷⁾¹⁰⁾¹⁵⁾。また、グループ人数は、ほとんどが1グループあたり10名以内で構成していた。

3) 科目と論題

母性看護に関連する科目の中で人工妊娠中絶や出生前診断の是非を論題にしたディベートや⁵⁾⁷⁾⁸⁾¹¹⁾¹²⁾¹⁵⁾、精神看護に関連する科目の中で性転換に関する論題や⁹⁾、成人看護関連の科目の中で臓器移植に関する論題¹³⁾など、生命の尊厳や性に関わる内容であった。さらに、老年看護関連の科目の中で身体拘束に関する論題や¹⁰⁾、精神看護関連の科目の中で鍵掛けに関する論題でのディベートなど¹⁴⁾、人権に焦点を当てた論題もあり、全体として、倫理に関する論題が多かった。また、科目の記載はなかったが、男性助産士導入⁴⁾などの、看護の専門性に関連する論題でのディベートが実施されていた。また、学生が体験した事例を用いたディベートも行われていた⁶⁾。

表1 ディベート取り組み状況 (1/2)

著者 (発行年)	導入の目的	方法			
		対象者 (グループ人数)	科目/論題	評価方法	評価結果
兼宗ら ⁴⁾ (2000)	男性助産士導入に対する賛否の背景を多面的に理解する.	短期大学3年生 381名 (12名)	科目記載なし/ 男性助産士導入の賛否.	ディベート前後に実施した男性助産士導入の賛否を問う質問紙調査の結果を分析.	男性助産士導入の賛否について、曖昧な意見が減少し、専門職の役割や機能等が明確になった.
櫻井ら ⁵⁾ (2000)	倫理的価値観を育成する.	短期大学2年生 119名 (19~20名)	母性看護学総論/ ①夫婦間以外の体外受精の是非 ②出生前診断の是非 ③夫婦間別姓の是非	ディベート終了後に実施した意見の変化や他者を理解する姿勢の変化に関する質問紙調査の結果を分析.	「賛成」・「反対」が減少し、「どちらともいえない」が増加した. ディベートにより、他者を理解する姿勢が深まった.
岸ら ⁶⁾ (2003)	危険に対する感受性が鈍い学生が、危険を敏感に察知する.	短期大学1年生~3年生 20名 (記載なし)	科目名記載なし/ 危険かどうか. 学生が体験したインシデント事例を用いた.	ディベート終了後に実施した危険性の判断を問う質問紙調査、および、授業についての感想の内容を分析.	学生が自ら、自己の判断の誤りに気づくことができた.
岸田 ⁷⁾ (2003)	論題に関する知識の習得、主体的学習能力の習得、討論能力、論理的思考能力の育成、グループダイナミクスの理解、自己主張トレーニング.	大学生 171名 (4~5名)	母性看護学I (概論) / 人工妊娠中絶は是か非か、他.	ディベート終了後に、東京大学の演習評価のために作成した評価票 26項目に、新たに 7項目を追加した全体評価と、授業内容の部分的な詳細評価を 4件法で得点化した調査結果を分析.	学生は、議論の仕方の練習になった、自己の意見を主張する練習になったなどの「ディベートスキル習得効果」を高く認知していた.
渋谷 ⁸⁾ (2003)	情報収集・論理的表現能力を養い、倫理的問題を自己の問題としてとらえる.	専修学校1年生 39名 (5名)	母性保健/ ①高校生の人工妊娠中絶は是か非か ②出生前診断によりダウン症の診断を受けたときの選択的中絶は是か非か. ②不妊症の場合、体外受精は是か非か.	授業についての感想文(自由記述)の提出を求め、内容を分析.	周産期の倫理的問題に目を向け、学習の動機付けになった. 理論的な発言には至らなかったが、人の意見を真剣に考え、発言を希望する学生もおり、日頃の講義とは異なった反応を示していた.
福田 ⁹⁾ (2004)	論理的思考能力とコミュニケーション能力、知識的基礎能力を養う.	短期大学2年生 78名 (6名)	精神看護学/ 性転換・性別を人為的に換えることは是か非か	ディベート終了後に実施したディベートの効果や学生評価に関する質問紙調査の結果を分析.	論題についての関心が高まった. また、客観的分析能力や論理的思考能力が高まった.
煙山ら ¹⁰⁾ (2005)	身体拘束について、学生自身が積極的に関心を示し、自分なりの考えをもつことができる.	大学3年生 26名 (記載なし)	老年介護演習/ 高齢者における治療・看護では、身体拘束をするべきである.	ディベート終了後に実施した、論題に関する関心や他者の意見を聞く姿勢の変化などについて 5段階評価を実施、分析.	自分の意見と他者の意見を比較したいというニーズが高まった. また、論題に関する認識が深まった.

表1 ディベート取り組み状況 (2/2)

著者 (発行年)	導入の目的	方法			
		対象者 (グループ人数)	科目/論題	評価方法	評価結果
布施 ¹¹⁾ (2006)	人との関係の中から自分自身について考えさらに成長できる.	専修学校 2 年生 75 名(6~7 名)	母性看護学 I / 人工妊娠中絶の是非(10 代同士のカップルが妊娠した事例を使用)	ディベート終了後に実施した「学びと感想」のレポート、および、質問紙を用いた自己評価を分析.	考え方の幅や視野が広がった。また、グループの学生同士で協力して取り組むことができ、事前学習をもとに意見を述べる事ができた。
佐久間ら ¹²⁾ (2006)	ディベートが倫理的感受性の向上に有効な方法であることを明らかにする.	専修学校 3 年生 45 名 (4~5 名)	母性看護総論/ 妊娠 21 週で胎児に Duchenne 型キンジストロフィーが判明したとき、生まない選択をすべきである、是か非か.	ディベート前後で質問紙調査を実施し、学生の思いや考えを自由記述により記載した内容を分析.	ディベートでは、論題を焦点化し、根拠となるデータや情報の収集・分析から問題の整理を行い、自分たちの主張を論理的に説明できた。また、自分と異なる立場や価値観を理解し、自己の考えを深めることができていたことから、ディベートは倫理的感受性の育成に必要とされる学習要素を有している。
舟根ら ¹³⁾ (2007)	ディベート論題についての理解を深め、理解力、分析力、構成力、伝達力を養う.	短期大学 2 年生 52 名 (8~9 名)	成人看護学 IV / 臓器移植と臓器提供について	ディベート終了後に実施した「ディベート演習についての意見・感想」のレポート分析.	多様な考え方があることを学び、自分の意見が変化したことや新しい意見を発見したことに気づいた。また、ディベートには、伝達力、構成力、知識、理解力、集中力、分析力が必要であることに気がついた。
小野ら ¹⁴⁾ (2009)	対象および対象のおかれた状況の理解や論理的思考能力、倫理観を養う.	短期大学 2 年生 64 名. (3 名)	精神看護学 II / 鍵かけの是非	ディベート終了後に、ディベートに関する意見や感想を自由記述により記載した内容を分析.	討論から自分の意見が変化した、結論を出すのが難しい、多角的な考えから自己を振り返ることなどを学んだ。
大久保 ¹⁵⁾ (2011)	人工妊娠中絶に関する倫理的・社会的な問題を理解し、助産師として必要な能力を考える。客観的分析力、論理的思考力、プレゼンテーションスキルを向上できる.	大学 3 年生で助産学を履修した 20 名. (5 名)	ウイメンズヘルス論/ 人工妊娠中絶の適応条件から「経済的理由」を削除すべきである.	ディベート終了後に実施した「論題についての自分の考えと助産師としての役割」のレポート、および、感想と講義への要望についての自由記述を分析.	人工妊娠中絶に関して、経済的理由が拡大解釈されている現状や、胎児の生命と人権の尊重などの社会的・倫理的問題を考えることができていた。また、助産師の役割がイメージでき、自己の課題について考えることができた。

4) 評価方法

評価項目は、ディベート前後での自己の意見の変化、論題に対する関心度など、ディベートの論題に関する認識の変化などがあつた。他には、他者を理解する姿勢や他者の意見を聞く態度、ディベートスキル習得効果、および、ディベートを行って学んだことや感想などが挙げられていた。評価方法は、自由記述による質問紙調査やレポートなど、主観的な評価が多かつた。他には、評価項目の測定用に作成された尺度を用いた自記式質問紙調査や自己評価表等が使用されていた。

5) 評価結果

論題について、関心の高まりや視野の広がりなどを示す結果が報告された⁸⁾¹⁰⁾¹¹⁾。ディベート前後での意見の変化については、曖昧な意見が減少したという結果の一方⁴⁾で、ディベート実施前に比べて実施後は「賛成」・「反対」が減少し、「どちらともいえない」が増加したという結果⁵⁾や「自分の意見が変化した」、「結論を出すのが難しい」などの結果¹³⁾¹⁴⁾が示されていた。それらの文献⁴⁾¹³⁾¹⁴⁾では、併せて、他者を理解する姿勢の深まりや多角的な考えから自己を振り返ることなどがディベートからの学びとしてあげられていた。その他、他者の意見を聞く態度、論理的な主張や議論の仕方など、ディベートスキルの習得につながったという結果⁷⁾⁹⁾¹²⁾¹³⁾や、発言を希望したり、自分の意見と他者の意見とを比較したいというニーズが高まったりなど¹⁰⁾、普段の講義とは異なる反応や、事前学習の必要性を感じていることが示された。全体として、ディベートの導入を評価している文献がほとんどであつたが、それらは、評価方法としてレポートや自己評価表を使用するなど、ディベートに取り組んだ学生の主観的な評価であつた。

IV. 考察

1. ディベートの取り組みの実際

看護基礎教育で強化すべき教育内容として、人間のベースになる倫理性、人に寄り添う姿勢の教育や状況を見極め、的確に判断する能力の育成などが挙げられており、これらのことが看護基礎教育の成果として求められている¹⁶⁾。本研究では、ディベート導入の目的や論題は、倫理に関わる内容が多かつた。その結果から、特に、看護基礎教育の成果である倫理性の育成について、従来の受け身的な講義形式の教育方法では不十分であり、それを補うものとしてのディベートに専修学校、短期大学、4年制大学の看護教育者が期待している状況が伺えた。また、現代の社会において、生命の尊厳や人権をめぐる価値観は多様化しており、そのような状況の中で倫理に関するディベートを行うには、より論理的に思考し表現しなければ審判団の判定を得ることは困難である。従って、倫理はディベート能力の習得に適した題材であるとも考えられ、本研究におけるディベートの取り組みは、看護基礎教育の成果を得るとともに、ディベート能力の習得をねらいとして取り組まれていることが考えられた。一方、ディベートは、母性看護関連の科目や、成人看護、老年看護、精神看護関連の科目など、倫理的な問題に直面することが多いと推測される科目で導入されている他に、科目の記載はなかつたが、男性助産士導入の賛否という、看護の専門性について問う題材でも実施されていたことから、看護の専門科目で広くディベートが導入されつつあることが推測される。

2. 看護基礎教育にディベートを導入する教育効果

評価方法は、自由記述による質問紙調査やレポートなどを用いた、学生の主観的な評価方法が多かつた。評価結果は、論題について、関心が高まった、あるいは、視野が広がった、また、ディベートスキルの習得につながった、普段の講義とは異なる反応や、事前学習の必要性を感じたことな

どを示す結果が多く、全体として、ディベートの導入を肯定的に評価している文献がほとんどであった。一方、ディベート前後での意見の変化については、ディベート実施前に比べて実施後は「賛成」・「反対」などのように、明確な意見が減少し、「どちらともいえない」が増加したという結果や、「自分の意見が変化した」、「結論を出すのが難しい」などの結果が示されていた。このような意見の変化は、様々な点について考えを巡らせる広い視野をもったことで生じた変化だと考えることができる。学生は、ディベートを導入した学習のプロセスの中で、論理的に思考し、そして他者を理解し、また、多角的な考えから自己を振り返ることを学んだことで、これまでとは異なる視点から題材について考えることができるようになったのではないかと。そして、このような学生の変化は、知が創造されていく段階としてとらえることができ、ディベートを導入する教育効果のひとつとして考えられるのではないだろうか。

とはいえ、全体として、ディベートの導入を肯定的に評価する結果になったのは、評価方法が学生の主観的評価を用いていることが影響していると考えられる。これは、ディベートの論題に関する意見の変化や学んだことなど、学生の認識面に評価内容の焦点をあてているためであると思われるが、ディベート能力や、ディベート論題に関する知識の習得状況を評価するには、学生の主観的評価を取り入れるだけでは充分とはいえない。以上をまとめると、看護基礎教育におけるディベート導入は、ディベート能力の育成の他に、論題として取り上げた事柄に関心を向けることなどや、倫理観を養うことなどに効果があると学生も看護教育者も主観的に感じているが、客観的な結果が示されていないことが現状であるといえる。また、本研究で示されたディベート前後での学生の意見の変化は、教育効果のひとつとして考えることができるが、十分に評価されていない。そのため、教育効果を示すことのできる評価方法を検

討、開発、検証していくことが必要であろう。

3. 学士課程における看護基礎教育でディベートを導入する際の課題

ディベートの取り組みに関する分析対象として選択した文献のなかで、対象者が大学生であった文献は4件であることから、大学でのディベートの取り組みの報告は、専修学校や短期大学の報告に比べると少ない。また、日本国内の看護系大学の数から考えても、数少ないのが現状といえる。つまり、学士課程における看護基礎教育でディベートに取り組んでいる報告をしている施設は限られている。この理由として、一般教育/教養の学問分野でディベートを含めたアクティブ・ラーニングが取り組まれていることから¹⁷⁾、看護の専門科目の教育においてはディベートの取り組みが少ないことが考えられた。また、そのために、ディベートを指導できる看護教育者の数も少ないことも考えられる。しかし、これでは、教養教育で学んだことが看護を学ぶ上で活かされていないことが考えられた。学士課程における看護基礎教育では、社会の期待に応える看護職者の排出のために、看護の対象と人々の尊厳を擁護する能力など、20の看護実践能力を育成することが期待されているが¹⁾、これらの能力を育成するには、教養教育での学びを土台にした看護の教育の積み重ねが重要であると考えられる。従って、ディベートの取り組みにおいても、看護に関連する内容を論題にしたディベートを、看護の専門科目の教育に導入し、教育効果を明らかにしていく必要があるだろう。また、看護教育者は、ディベートを行うための指導力を身につけるとともに、ディベートに精通した教養教育の教員と連携した指導体制を整えることが課題であると考えられる。

V. まとめ

日本国内の看護基礎教育におけるディベートの取り組みに関する文献から、ディベートの取り組

みの実際を明らかにし、看護基礎教育でディベートを導入する教育効果、および、学士課程における看護基礎教育でディベートを導入する際の課題について検討した。

1. ディベートの取り組みは、倫理性の育成やディベート能力の習得をねらいとして取り組まれており、看護の専門科目で広くディベートが導入されつつあることが推測された。

2. 評価方法は、自由記述による質問紙調査やレポートなどを用いた、学生の主観的な評価が多かった。評価結果は、論題について、関心が高まった、また、ディベートスキルの習得につながったなど、全体として、ディベートの導入を肯定的に評価している文献がほとんどであった。一方、ディベート前後での意見の変化については、ディベート実施前に比べて実施後は「賛成」・「反対」が減少し、「どちらともいえない」が増加したなどの結果が示されていた。今後は、教育効果を示すことのできる評価方法を検討、開発、検証していく必要性が示唆された。

3. 大学でのディベートの取り組みの報告は数少ない現状であり、学士課程における看護基礎教育でディベートに取り組んでいる報告をしている施設は限られていた。今後は、看護の専門科目の教育にディベートを導入し、教育効果を明らかにしていく必要があるとともに、ディベートに精通した教養教育の教員と連携した指導体制を整えることが課題である。

引用文献

- 1) 文部科学省 (2011) : 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告, (平成23年3月11日) .
- 2) 中央教育審議会 (2009) : 予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ (審議まとめ) .
- 3) 北岡俊明 (2003) : ディベート入門, 日本経済新聞社, 東京.
- 4) 兼宗美幸, 坂本めぐみ, 渡部尚子 (2000) : 看護学生の男性助産士に関する意識, 男性助産士導入のディベート前後における調査から, 埼玉県立大学短期大学部紀要, 2, 81-88.
- 5) 櫻井文子, 神崎江利子, 松本友子 (2000) : 母性看護学におけるディベートを活用した倫理的価値観育成の為の教育効果について, 聖隷学園浜松衛生短期大学紀要, 23, 68-75.
- 6) 岸あゆみ, 犬塚久美子 (2003) : 危険への感受性を育むディベート学習, 聖隷クリストファー大学看護短期大学部紀要, 26, 15-22.
- 7) 岸田泰子 (2003) : ディベート導入による母性看護学の授業展開に関する考察, 島根医科大学紀要, 26, 11-17.
- 8) 渋谷えみ (2003) : 母性保健の講義にディベートを取り入れた授業評価, 日本看護学会論文集, 母性看護34号, 135-137.
- 9) 福田由紀子, 原田真澄, 小林純子 (2004) : 精神看護学における「ディベート」授業展開と課題, 日本赤十字愛知短期大学紀要, 15, 83-94.
- 10) 煙山晶子, 小笠原サキ子 (2005) : 老年看護学における教育方法の検討, ディベートの教育効果について, 秋田大学医学部保健学科紀要, 13 (2), 50-57.
- 11) 布施明美 (2006) : 母性看護学の学習状況と今後の課題, 学生のレポートとアンケートより, 神奈川県立よこはま看護専門学校紀要, 13, 36-34.
- 12) 佐久間良子, 有田久美, 黒髪恵, 須崎しのぶ (2006) : ディベートが看護学生の倫理的感受性に及ぼす学習効果, 日本看護学会論文集, 看護教育, 37, 12-14.
- 13) 舟根妃都美, 成田円 (2007) : 成人看護学におけるディベート演習についての検討, 名寄市立大学紀要, 1, 15-21.
- 14) 小野晴子, 土井英子, 住野好久 (2006) : ディベートによる精神疾患患者の理解を深める授業方法の工夫, 「鍵かけ」の論題を教材にして, 新見公立短期大学紀要, 30, 9-15.

- 15) 大久保友香子, 植松紗代, 和泉美枝, 眞鍋えみ子 (2008) : 助産学履修学生による人工妊娠中絶を論題にしたディベートの試み, 京都府立医科大学看護学科紀要, 21, 43-49.
- 16) 厚生労働省 (2011) : 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書 (平成23年2月28日) .
- 17) 溝上慎一 (2007) : アクティブ・ラーニング導入の実践的課題, 名古屋高等教育研究, 7, 269-287.